

宮脇俊文先生 略歴及び著作目録

略 歴

1953年5月8日兵庫県神戸市生れ

学 歴 [高等学校入学以降]

1969年 4月：兵庫県立兵庫高等学校入学

1972年 3月：同上卒業

1973年 4月：上智大学文学部英文科入学

1977年 3月：同上卒業

1977年 4月：上智大学大学院文学研究科英米文学専攻入学

1979年 3月：同上修了（文学修士）

職 歴

1979年 4月 1日～1982年 9月 30日：関西外国語短期大学外国語学部英語学科助手

1981年 1月 3日～1982年12月 20日：ガステイヴァス・アドルフアス・カレッジ（米国ミネソタ州）交換教授

1982年10月 1日～1987年 3月 31日：関西外国語短期大学外国語学部英語学科専任講師

1984年 4月 1日～1987年 3月 31日：神戸山手女子短期大学英文学科非常勤講師

1987年 4月 1日～1989年 3月 31日：淑徳短期大学英語学科助教授

1989年 4月 1日～1993年 3月 31日：成蹊大学経済学部助教授

1989年 4月 1日～1994年 3月 31日：慶應義塾大学法学部非常勤講師

1992年 4月 1日～1994年 3月 31日：和光大学人文学部非常勤講師

1993年 4月 1日～2019年 3月 31日：成蹊大学経済学部教授

1994年 4月 1日～1996年 3月 31日：ブラウン大学（米国ロードアイランド州）客員研究員

1996年 4月 1日～2000年 3月 31日：明治大学文学部非常勤講師

1997年 4月 1日～2001年 3月 31日：立教大学全学共通カリキュラム非常勤講師

1997年 4月 1日～1999年 3月 31日：埼玉大学教育学部非常勤講師

1997年 4月 1日～1999年 3月 31日：東洋大学文学部非常勤講師

1997年 4月 1日～2001年 3月 31日：実践女子大学文学部非常勤講師

1999年 4月 1日～2001年 3月 31日：実践女子大学大学院文学研究科非常勤講師

2000年10月 1日～2005年 9月 30日：立教大学文学部非常勤講師
 2003年 4月 1日～2006年 3月 31日：明治大学文学部非常勤講師
 2007年 4月 1日～2015年 3月 31日：早稲田大学国際教養学部非常勤講師
 2007年 8月 20日～2007年12月 31日：ミネソタ大学（米国ミネソタ州）東アジア言語・文学
 学科客員教授
 2008年 1月 1日～2008年 8月 19日：同上客員研究員
 2014年 7月：佛教大学文学部非常勤講師（夏季集中講義）
 2019年 4月 1日～2022年 3月 31日：成蹊大学経済学部特別任用教授
 2022年 3月 31日：成蹊大学退職

研究分野

アメリカ文学, アメリカ文化研究, ジャズ研究, 日米比較文学

著作目録（研究業績一覧）

著書（単著）

1. 『村上春樹ワンダーランド』（いそっぷ社, 2006年）
2. 『村上春樹を読む。——全小説と作品キーワード』（イーストプレス, 2010年）
3. 『アメリカの消失——ハイウェイよ、再び』（水曜社, 2012年）
4. 『グレート・ギャツビーの世界——ダークブルーの夢』（青土社, 2013年）
5. 『村上春樹を、心で聴く——奇跡のような偶然を求めて』（青土社, 2017年）
6. 『ジャズ・エイジは終わらない——「夜はやさし」の世界』（青土社, 2019年2月）

（英語教育・テキスト系）

1. （井上健, 菱川英一と共編注）『Detective Stories by Ed McBain <エド・マクベイン短編集>』（大阪教育図書, 1987年）
2. 『ハロー、ペンパル！——シーズン別やさしい英文レターの書き方』（三修社, 1991年）
3. 『Let's Write in Plain English: Plain Englishで英作文』（三修社, 1991年）
4. 『これでらくらく書ける英文手紙の決まりパターン——出す相手によって書き分けられる』（SSコミュニケーションズ, 1993年）
5. 『「3分で書ける」英文レターコツのコツ——インターネット時代の書く英語』（SSコミュニケーションズ, 1997年）

編著

1. (高野一良と共編)『アメリカの嘆き——米文学史の中のピューリタニズム』(松柏社, 1999年)
2. (平石貴樹と共編)『レイ、ぼくらと話そう——レイモンド・カーヴァー論集』(南雲堂, 2004年)
3. (細川周平, マイク・モラスキーと共編)『ニュー・ジャズ・スタディーズ』(アルテスパブリッシング, 2010年)
4. 『映画は文学をあきらめない——ひとつの物語からもうひとつの物語へ』(水曜社, 2017年)

共著

1. 『アメリカン・ラビリンス』関西アメリカ研究会編(京都玄文社, 1986年)「“The Diamond as Big as the Ritz”——ファンタジーと社会的要素」(113-27頁)担当
2. 『アメリカ文学ミレニアム——[I]』國重純二編(南雲堂, 2001年)「<海の変化>の物語——『夜はやさし』と『エデンの園』」(397-412頁)担当
3. *F. Scott Fitzgerald in the 21st Century: Centennial Essays*. Ed. Jackson Bryer, Ruth Prigozy and Milton Stern (University of Alabama Press, 2003). Toshifumi Miyawaki, “A Writer for Myself: F. Scott Fitzgerald and Haruki Murakami” (pp. 267-278).
4. 『英語の感覚と表現——共感覚表現の魅力に迫る』吉村耕治編(三修社, 2004年)「F. Scott Fitzgeraldの感覚と表現——Daisyの声と資本主義社会」(227-41頁)担当
5. 『英米文学のリヴァーブ——境界を越える意思』鈴江璋子, 植野達郎編(開文社出版, 2004年)「翻訳をめぐる冒険——村上春樹とアメリカ文学」(197-230頁)担当
6. 『現代女性作家読本①山本文緒』現代女性作家読本刊行会編(鼎書房, 2015年)「ほんとうの自分を探して——山本文緒の『シュガーレス・ラブ』を読む」(46-51頁)担当
7. 『現代女性作家読本②林真理子』現代女性作家読本刊行会編(鼎書房, 2015年)「男に焦土での記憶を求める女——日本のバブルと『戦争特派員』」(36-41頁)担当
8. 『昭和文化のダイナミクス——表現の可能性とは何か』中江桂子編(ミネルヴァ書房, 2016年)「村上春樹とジャズ——新しい文体が模索するもの」(145-69頁)担当
9. 『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』巽孝之監修(小鳥遊書房, 2021年)「Leo Marx——アメリカの楽園志向と自然征服の矛盾」(440-43頁)担当

論文

1. Pearl's “Errand”: Hawthorne's View of Nature in *The Scarlet Letter* (1) 『関西外国語大学研究論集』第31号, 1979年, 85-97頁

2. Pearl's "Errand": Hawthorne's View of Nature in *The Scarlet Letter*(2) 『関西外国語大学研究論集』第32号, 1980年, 23-34頁
3. Pearl's "Errand": Hawthorne's View of Nature in *The Scarlet Letter*(3) 『関西外国語大学研究論集』第33号, 1981年, 1-18頁
4. "St. Paul in Fitzgerald" 『サウンディングズ』No. 9, 1983年, 187-199頁
5. 「S. Fitzgerald と S. Lewis —— *The Great Gatsby* と *Arrowsmith* の場合」 『関西外国語大学研究論集』第40号, 1984年, 19-30頁
6. 「Fitzgerald と Lewis の中西部 —— *The Great Gatsby* と *Main Street* の場合」 『大阪私立短期大学協会研究報告集』第21集, 1985年, 55-60頁
7. 「フィッツジェラルドの現代性 —— 村上春樹、マッキナニー、ベイティ」 『ユリイカ』第20巻第14号 (特集: フィッツジェラルド —— きらびやかで哀しいアメリカン・グラディティ) 1988年, 70-75頁
8. 「娘から見たスコットとゼルダ」 『ユリイカ』第20巻第14号 (特集: フィッツジェラルド —— きらびやかで哀しいアメリカン・グラディティ) 1988年, 114-118頁
9. 「川のこちら側 —— 『緋文字』に見られる社会」 『淑徳短期大学研究紀要』第28号, 1989年, 25-34頁
10. 「バリ時代のヘミングウェイとフィッツジェラルド —— 二人の間に友情は存在したか?」 『ユリイカ』第21巻第10号 (特集: ヘミングウェイ —— 崩壊したくアメリカン・ヒーロー) 神話) 1989年, 142-50頁
11. 「時代・世代・フィッツジェラルド —— 『楽園のこちら側』はく失われた世代の作品か?」 『成蹊大学経済学部論集』23巻2号, 1992年, 101-110頁
12. 「*Sister Carrie* と *The Great Gatsby* —— <過剰な欲望>と<過剰な夢>の世界」 『成蹊大学経済学部論集』24巻1号, 1993年, 124-31頁
13. 「予言的自伝小説に見られるフィッツジェラルドの全体像 —— *The Beautiful and Damned*」 『英語青年』第142巻第7号, 1996年, 358-59頁
14. 「『エンパシー』を正しい日本語に置き換える」 『アエラムック「村上春樹がわかる。』朝日新聞社, 2001年, 86-89頁
15. 「『マイ・ロスト・シティ』 —— 『小説観』を提示するもう一つの作品」 『アエラムック「村上春樹がわかる。』朝日新聞社, 2001年, 90-91頁
16. 「白人のジャズ・エイジと黒人のジャズ・エイジ —— *The Great Gatsby* の20年代」 『ヘミングウェイ研究』3号, 2002年, 45-57頁
17. 「ニューイングランドの片田舎で自己への愛を叫ぶ —— 『ウォールデン』から『グレート・ギャツビー』へ」 『英語青年』第150巻第5号, 2004年, 273-75頁

18. 「日本人の魂を求めて——村上春樹作品にみる日本とアメリカ」『英語青年』第152巻第5号, 2006年, 262-65頁
19. 「小説と映画の想像力——ヘミングウェイとフィッツジェラルドの場合」『ヘミングウェイ研究』12号, 2011年, 17-30頁
20. (田中優子, 挾本佳代と共著) 「戦後日本人の精神のゆくえ——昭和歌謡にみる情念」成蹊大学経済学部ディスカッション・ペーパー, No. 111, 2011年
21. 「真昼の花火——村上春樹とレイモンド・カーヴァー」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年2月
22. 「アメリカの正義と『アラバマ物語』」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年4月
23. 「スモールタウンというアメリカの小宇宙」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年5月
24. 「ありふれた日常の中の驚異」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年6月
25. 「真珠のような日常を探して——永遠なる『オン・ザ・ロード』」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年8月
26. 「Now Is the Time! ——『オン・ザ・ロード』再び」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年10月
27. 「『今』を生きるということ——ホールデン・コールフィールドの場合」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2014年12月
28. 「アメリカ人特有の思い上がりと傷つく人々」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2015年2月
29. 「愛、バードマン、そしてアメリカの現実」柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2015年4月
30. 「戦争体験とPTSD——サリンジャーから村上春樹へ」(前編) 柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2015年10月
31. 「戦争体験とPTSD——サリンジャーから村上春樹へ」(後編) 柏書房ウェブマガジン『アルカーナ・ムンディ』2015年11月
32. 「猫が導く闇の世界——村上春樹の『猫の町』」『現代思想』第44巻第4号(臨時増刊号 総特集◎imago 猫!) 2016年, 129-38頁
33. 「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史認識」『成蹊大学経済・経営論集』第52巻第1号, 2021年, 33-51頁
34. “The Aesthetics of the Unrealistic Dreamers: F. Scott Fitzgerald and Haruki Murakami” 『成蹊大学経済・経営論集』第53巻第1号, 2022年, 113-133頁

翻訳

1. F・スコット・フィッツジェラルド「わがシークはどこへ行ったか?」『ユリイカ』第20巻第14号（特集：フィッツジェラルド——きらびやかで哀しいアメリカン・グラフィティ）1988年，52-57頁
2. ゼルダ・フィッツジェラルド「フラッパーへの賛辞」『ユリイカ』第20巻第14号（特集：フィッツジェラルド——きらびやかで哀しいアメリカン・グラフィティ）1988年，58-60頁
3. F・スコット・フィッツジェラルド「思いあがった男たち」『ユリイカ』第20巻第14号（特集：フィッツジェラルド——きらびやかで哀しいアメリカン・グラフィティ）1988年，61-65頁
4. スコット&ゼルダ・フィッツジェラルド「八年間をふりかえって」『ユリイカ』第20巻第14号（特集：フィッツジェラルド——きらびやかで哀しいアメリカン・グラフィティ）1988年，66-69頁
5. ジャネット・フラナー，『パリ・イエスタデイ』（白水社，1997年）
6. アライン・エイモン編，『大地は病んでいる——アメリカン・インディアンの自然観』（「CAPS ディスカッション・ペーパー」#HJ-1）成蹊大学アジア太平洋研究センター，2002年

その他

（解説・梗概等）

1. 「きらびやかで哀しい、感性の小説家——F・スコット・フィッツジェラルド」『ユリイカ』第20巻第14号（特集：フィッツジェラルド——きらびやかで哀しいアメリカン・グラフィティ）1988年，119-34頁
2. 「村上春樹作品詳細ガイドマップ 小説からエッセイ、インタビューまで」『ユリイカ』第21巻第8号（総特集＝村上春樹の世界）1989年，199-255頁
3. 村上春樹作品解説「もう一人の『僕』——パラレルワールドの確立」「人生は回転木馬——悩める現代人のフォークロアとして」「多彩でナイーブな仲間たち」「ビジュアルでも魅せる豊かな感性」『SAPIO』1991年1月10日号
4. 「村上春樹・ことばの宇宙」「The Other Side of Haruki Murakami 単行本未収録のエッセイ、対談、インタビュー（90年以降）」「年表村上春樹の足跡」『ユリイカ』第32巻第4号（総特集＝村上春樹を読む）2000年，76-80頁，223-25頁，226-29頁
5. 「時代に翻弄されたスコットとゼルダ」『ミュージカル スコット&ゼルダ』公演パンフレット，2015年，ホリプロ，28-31頁
6. 「解説」ジョセフ・ミッチェル著『さよなら、シャーリー・テンプル』2018年，柏書房，283-86頁

(コラム)

7. 「フィッツジェラルドの生地で——カウリー、スコッティとの出会い」 The Kansai Gaidai News 84, 1983年4月, 7頁
8. 「現代都市生活者への静かなるメッセージ」『SAPIO』1991年1月10日号, 75頁
9. 「もう一人の『僕』——パラレルワールドの確立」『SAPIO』1991年1月10日号, 75-77頁
10. 「繁栄のこちら側——若さと喪失とジャズ・エイジ」映画『ベンジャミン・バトン——数奇な人生』劇場用パンフレット 2002年3月, 62-63頁
11. 「しのび寄るジャズ」特集「Bernice Bobs Her Hair」『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 20, 2005年, 7頁
12. 「ミニ・シンポジウム再録 『英語教育における小説の可能性——フィッツジェラルドの場合』『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 21, 2006年, 14頁
13. 「村上版『グレート・ギャツビー』を手にとりて——これだけは言っておきたいこと」特集「村上春樹訳『グレート・ギャツビー』を読む」『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 22, 2007年, 2-3頁
14. 「2008年のセント・ポール——作家の生まれた場所で」特集「フィッツジェラルドとミネソタ」『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 23, 2008年, 1-2頁
15. 「フィッツジェラルドという共有財産を生かすために——いま、ここから、われわれにできること」『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 24, 2009年, 1頁
16. 「秋田で考えたこと——小川高義氏の講演を聞いて」, ミニ・シンポジウム「フィッツジェラルドの短編再評価: 再評価には何が必要なのか」再録, 『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 25, 2010年, 2-4頁
17. 「マンダム訪問記——『グレート・ギャツビー』はみんなのもの」(特集「マンダム社の男性化粧品ブランド『ギャツビー』命名の由来を探る」)『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 25, 2010年, 5-6頁
18. 「華やかなジャズ・エイジに潜む、ひたむきな心、哀しみの極点。』『華麗なるギャツビー』映画評, 『フィガロジャポン』(No. 446, 阪急コミュニケーションズ) 2013年8月号, 108頁
19. 「『グレート・ギャツビー』に賭けるハリウッドの夢」, 特集「シンポジウム『フィッツジェラルドとハリウッド』」『日本スコット・フィッツジェラルド協会ニューズレター』No. 27, 2012年, 9-10頁
20. 「今が時だ『ハルキスト』狂騒曲改めるべき／識者見解」『日刊スポーツ』2019年10月11日
21. 「村上春樹の心中は…文章で『声』を聞きたい／専門家」『日刊スポーツ』2020年10月9日
(論考)
22. 「英文学科の発展を導いた教授陣——プロフィール(2)ヨゼフ・ロゲンドルフ『上智英文

90年』（彩流社，2018年）61-66頁

23. 「ロードの先でまた会おう」『キネマ旬報』（2021年4月上旬号 No. 1862）巻頭特集アジア人監督が撮るアメリカ『ノマドランド』論考，12-13頁
24. 「村上春樹とJAZZのクールな関係」nippon.com 2021年4月12日（英語，ロシア語，中国語，フランス語をはじめ8カ国語で展開）
25. “A Change of Heart”『晃 | 影 - 史帝夫・麥柯里個展』（‘S WANDERFUL | Making Pictures - Steve McCurry Solo Exhibition）台北當代藝術館編 2018年12月，30-31頁
26. （対談）柴田元幸×宮脇俊文「1920年代を超えて」『キネマ旬報』2013年7月上旬号 No. 1640（巻頭特集：バズラーマン MEETS フィッツジェラルド『華麗なるギャツビー』）28-35頁
27. （項目執筆）“Haruki Murakami” in *St. James Guide to Science Fiction Writers*, St. James Press, 1996, pp. 687-88.
28. “It Don’t Mean a Thing, If It Ain’t Got That Swing: An Interview with Haruki Murakami” (with Larry McCaffery and Sinda Gregory), *The Review of Contemporary Fiction*, Vol. XXII, no. 2, 2002, 111-19.
29. 「原作者スコット・フィッツジェラルドってどんな人？——成蹊大学教授（日本フィッツジェラルド協会前会長）宮脇俊文さんに聞いた」『GQ JAPAN』2013年6月19日号
30. 「フィッツジェラルドとジャズ・エイジ、そしていまなぜ、『グレート・ギャツビー』なのか」「ヘミングウェイから映し出されるフィッツジェラルドの肖像」「フィッツジェラルドが、ハリウッドへと向かった理由？」『メンズクラブ』，別冊付録『Esquire』「華麗なるギャツビー立体特集 フィッツジェラルド、お前は誰だ？」2013年7月号，ハースト婦人画報社，14-19頁
31. 「人生の価値を常に問うこと」特集「A Moveable Feast」移動祝祭日『Nile’s Nile』No. 246（2017年8月号）34-35頁

書評

1. 伊豆大和『フィッツジェラルドの長編小説——自己投影の世界』（旺史社，1988）『英語青年』
2. ポール・ラドニック『あそぶが勝ちよ』（白水社，1991）『SAPIO』
3. トム・ウルフ『虚栄の篝火』（文藝春秋，1991年）『週刊ポスト』
4. 金関寿夫『現代芸術のエポック・エロイク——パリのガートルード・スタイン』『東京新聞』
5. フォレスト・カーター『リトル・トリー』（めるくまーる，1991年）『SAPIO』
6. マルコムX『マルコムX自伝』（河出書房新社1993年）『SAPIO』
7. アレクサンドラ・リプリー『スカーレット』（新潮社，1992）『SAPIO』

8. スチュアート・ダイベック 『シカゴ育ち』(白水社, 1992年)『東京新聞』
9. スタニスロース・ジョイス 『兄の番人』(みすず書房, 1993年)『SAPIO』
10. ウラジミール・ナボコフ 『ナボコフのドン・キホーテ講義』(晶文社, 1992年)『週刊ポスト』
11. アンドレ・デビュース 『アダルトリー』(紀伊國屋書店, 1992年)『週刊ポスト』
12. —『プリティ・ガール』(紀伊國屋書店, 1993年)『週刊ポスト』
13. 柴田元幸・斎藤英治編訳 『世界の肌ざわり——新しいアメリカの短編』(白水社, 1993年)『東京新聞』
14. 高橋大輔 『ロビンソン・クルーソーを探して』(新潮社, 1999年)『週刊ポスト』
15. 原川恭一編 『アメリカ文学の冒険——空間の想像力』(彩流社, 1998年)『アメリカ文学研究』(第36号)
16. 森岡祐一他 『酔いどれアメリカ文学——アルコール文学文化論』(英宝社, 1999年)『英文学研究』(第77巻第2号)
17. ジェームズ・チャップマン 『ジェームズ・ボンドへの招待』(徳間書店, 2000年)『週刊ポスト』
18. クリストファー・ホートリー 『投書狂 グレアム・グリーン』(晶文社, 2001年)『週刊ポスト』
19. 巽孝之 『リンカーンの世紀』(青土社, 2002年)『北海道新聞』
20. “Invisible Boundaries”: Review of *Underground* and *Sputnik Sweetheart* by Haruki Murakami (March/April 2002) *American Book Review*
21. 巽孝之 『アメリカ文学史——駆動する物語の空間』(慶應義塾大学出版会, 2003年) *Soundings Newsletter No. 47*.
22. ウィリアム・サマセット・モーム 『ドン・フェルナンドの酒場で——サマセット・モームのスペイン歴史物語』(原書房, 2006年)『週刊ポスト』
23. 柴田元幸編訳 『どこにもない国——現代アメリカ幻想小説集』(松柏社, 2006年)『週刊読書人』
24. 野間正二 『「グレート・ギャツビー」の読み方』(創元社, 2008年)『週刊読書人』
25. 前田一平 『若きヘミングウェイ——生と性の模索』(南雲堂, 2009年)『週刊読書人』
26. ドン・デリーロ 『墜ちてゆく男』(新潮社, 2009年)『時事通信』
27. ハ・ジン 『自由生活(上・下)』(NHK出版, 2010年)『時事通信』
28. 井上文勝 『「千の風になって」——紙袋に書かれた詩』ポプラ社, 2010年)『時事通信』
29. トマス・ピンチオン 『メイスン&ディクスン(上・下)』(新潮社, 2010年)『時事通信』
30. ヒラリー・マンテル 『ウルフ・ホール(上・下)』(早川書房, 2011年)『時事通信』
31. ジャック&キャロライン・フレミング 『偉大なアイデアの生まれた場所——シンキング・プレイス』(清流出版, 2011年)『時事通信』

32. ジョナサン・サフラン・フォア 『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』(NHK出版, 2011年)『時事通信』
33. 小倉孝誠 『愛の情景——出会いから別れまでを読み解く』(中央公論新社, 2011年)『時事通信』
34. ジョナサン・フランゼン 『フリーダム』(早川書房, 2012年)『時事通信』
35. 新井潤美 『執事とメイドの裏表——イギリス文化における使用人のイメージ』(白水社, 2011年)『時事通信』
36. スーザン・オーリアン 『リンチンチン物語——映画スターになった犬』(早川書房, 2012年)『時事通信』
37. キャロル・スクレナカ 『レイモンド・カーヴァー——作家としての人生』(中央公論社新社, 2013年)『時事通信』
38. ポーラ・マクレーン 『ヘミングウェイの妻』(新潮社, 2013年)『週刊読書人』
39. 村上春樹 『女のいない男たち』(文藝春秋, 2014年)『時事通信』
40. ジョン・ウィリアムズ 『ストーナー』(作品社, 2014年)『週刊読書人』
41. 岡田暁生, フィリップ・ストレンジ 『すごいジャズには理由がある——音楽学者とジャズ・ピアニストとの対話』(アルテスパブリッシング, 2014年)『時事通信』
42. クレア・トマリソ 『チャールズ・ディケンズ伝』(白水社, 2014年)『時事通信』
43. アリス・マンロー 『愛の深まり』(彩流社, 2014年)『時事通信』
44. 鳥飼玖美子 『英語教育論争から考える』(みすず書房, 2014年)『時事通信』
45. チャールズ・J・シールズ 『「アラバマ物語」を紡いだ作家』(柏書房, 2014年)『共同通信』
46. ウィリアム・ピーター・ブラッティ 『センター 18』(東京創元社, 2015年)『時事通信』
47. D・シールズ, S・サレルノ 『サリンジャー』(角川書店, 2015年)『時事通信』
48. ジョアンナ・ラコフ 『サリンジャーと過ごした日々』(柏書房, 2015年)『時事通信』
49. 村上春樹 『職業としての小説家』(スイッチ・パブリッシング, 2015年)『時事通信』
50. 松本昇・中垣恒太郎・馬場聡編 『アメリカン・ロードの物語学』(金星堂, 2015年)『アメリカ文学研究』(53号)
51. アリス・マンロー 『ジュリエット』(新潮社, 2016年)『時事通信』
52. ハーパー・リー 『さあ、見張りを立てよ』(早川書房, 2016年)『時事通信』
53. J・M・クッツェー 『イエスの幼子時代』(早川書房, 2016年)『時事通信』
54. ジョイス・キャロル・オーツ 『邪眼——うまくいかない愛をめぐる4つの中編』(河出書房新社, 2016年)『時事通信』
55. 時実早苗 『ポストマンの詩学——郵便配達の文化表象』(彩流社, 2017年)『時事通信』
56. 森山威男 『スイングの核心』(ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス,

- 2017年)『時事通信』
57. 川上未映子, 村上春樹『みみずくは黄昏に飛びたつ』(新潮社, 2017年)『時事通信』
 58. 村上春樹『騎士団長殺し(第1部・第2部)』(新潮社2017年)『時事通信』
 59. コルソン・ホワイトヘッド『地下鉄道』(早川書房, 2017)『共同通信』
 60. ジョン・チーパー『巨大なラジオ/泳ぐ人』(新潮社, 2018年)『時事通信』
 61. リチャード・フラナガン『奥のほそ道』(白水社, 2018年)『時事通信』
 62. 深澤直人『デザインの輪郭』(TOTO出版, 2005年)アジア太平洋研究センター「CAPS Newsletter」2018年7月
 63. 村上春樹『一人称単数』(文藝春秋, 2020年)『時事通信』

学会発表

(国際学会)

1. “The Writer for a Writer: Scott Fitzgerald and Haruki Murakami” パネル・ディスカッション “Fitzgerald and Other Writers” (1996年9月) フィッツジェラルド生誕百年記念学会 於プリンストン大学 (米国)
2. “Jazz, America and the Writings of Murakami Haruki” パネル・ディスカッション “Jazz and Japan” (2001年8月) 第二回国際アジア学会 於ベルリン自由大学 (ドイツ連邦共和国)
3. “Minnesota Winter in Fitzgerald’s Literary Imagination” (2017年6月27日) 14th International F. Scott Fitzgerald Conference 於ミネソタ州セント・ポール (米国)

(国内学会：1996年以降のシンポジウムと講演に限る)

4. シンポジウム：「*The Great Gatsby* を読む」日本アメリカ文学会東京支部例会 (司会兼講師：宮脇俊文, 講師：武藤脩二, 青山南, 巽孝之) 1996年12月, 於慶應大学三田キャンパス
5. シンポジウム：「アメリカ文学と映像表象」サウンディングズ英語英米文学会第48回研究発表会 (司会兼講師：宮脇俊文, 講師：巽孝之, 榎木玲子, 村上由見子), 2003年10月4日, 於・東京水産大学 (現・東京海洋大学)
6. シンポジウム：「ジャズから読むアメリカ文学——新たな研究の可能性を求めて」第76回日本英文学会全国大会 (司会兼講師：宮脇俊文, 講師：細川周平, 椿清文, マイク・モラスキー) 2006年5月, 於大阪大学
7. シンポジウム：「ヘミングウェイと映画」日本ヘミングウェイ協会全国大会 (司会兼講師：塚田幸光, 講師：長澤唯史, 宮脇俊文) 2010年12月12日, 於関東学院大学関内メディアセンター
8. シンポジウム：「フィッツジェラルドとハリウッド」日本スコット・フィッツジェラルド協会総会 (基調講演：Leo Chen, 司会兼講師：宮脇俊文, 講師：金原瑞人, 長澤唯史,

杉野健太郎) 2012年4月28日, 於成蹊大学

9. シンポジウム:「ハイウェイとスモールタウンのアメリカン・ナラティブ」日本英文学会シンポジウム(司会兼講師:宮脇俊文, 講師:金原瑞人, 馬場聡, 下條恵子) 2014年5月25日, 於北海道大学
10. 「ジャズと春樹とアメリカと」アメリカ文学会東京支部特別講演(司会:後藤和彦) 2017年11月18日, 於慶應大学三田キャンパス

講演

1. “Japan in Hollywood Now—How Clint Eastwood Described Japan” Joy Nakagawa との対談(2007年10月22日) ミネソタ大学比較文化, 東アジア言語学科共催シンポジウム
2. Lecture: “Fireflies in the Dark: Fitzgerald’s *Tender Is the Night* and Haruki Murakami’s *Norwegian Wood*” (November 13, 2007) Asian Literature, Culture and Media Workshop, University of Minnesota, USA
3. 「村上春樹と中国」法政大学国際日本学インスティテュート講演会(2009年5月)
4. 「村上春樹とアジア——日本人の喪失感の原点」武蔵野地域自由大学講演会(2009年11月4日) 於成蹊大学
5. 「ジャズと春樹と武蔵野と」成蹊大学公開講座(2010年10月30日) 於成蹊大学
6. 「村上春樹から見る日本のゆくへ——喪失から再生へ(五回講演)」(2012年6月) 武蔵野市自由大学講座 於武蔵野プレイス
7. 「アカデミズムとジャーナリズムの出会いとところ」(白川浩介氏との対談) 成蹊大学公開講座(2013年11月2日) 於成蹊大学
8. 「ドナルド・トランプを支持する人々——アメリカ文学の声なき主人公たち」(2016年6月30日) 成蹊大学経済学部学会研究会
9. 「村上春樹の中の中国と日中戦争」(2018年5月26日) 成蹊大学公開講座 於成蹊大学
10. 「周辺の文学者として」成蹊大学最終講義(2019年3月23日) 於成蹊大学
11. Luncheon Lecture: “Murakami and Fitzgerald: A Tender Look at the Marginalized People” (July 2019) The Women’s Club of Minneapolis, Minnesota, USA.

学会活動(役職歴)

1. 日本アメリカ文学会会員(幹事)
2. 日本英文学会会員
3. 日本フィッツジェラルド協会会員(副会長, 会長)
4. 日本ヘミングウェイ協会会員(運営委員)

5. サウンディングズ英語英米文学会会員（評議委員）
6. 上智英文学会会員（評議委員）

受賞

1. 1984年10月 サウンディングズ英語英米文学会刈田賞（論文“St. Paul in Fitzgerald”）
2. 2007年7月 成蹊会学術賞（『村上春樹ワンダーランド』）